

*Digest of Science of Labours*

# 労働の科学

2023  
*November*  
Vol. 78, No. 11



並ぶかたち／菅沼 緑

## 特集

### 地域社会の未来像を見つめて

地域で『多文化共生』を目指す！ ～長崎県島原半島の一例／松下英爾  
介護の仕事で地域に恩返しを／遠藤さとみ

## 連載

労研アーカイブを読む⑨

椎名和仁

グリーンケアとリーガルケア②

細川 潔

ILOインド南アジア産業安全保健通信⑪

川上 剛

歌舞伎で生きる人たち その二十二

湯浅晶子

大原記念労働科学研究所

つれづれなるままに⑭

斉藤 進

自由と想像⑪

菅沼 緑

## 巻頭言

労研の研究の今昔

岸田孝弥

# 労働の科学

2023  
November  
Vol. 78, No. 11

巻頭言

俯瞰 (ふかん)

## 労研の研究の今昔

岸田 孝弥 [大原記念労働科学研究所 主管研究員] ..... 1

岸田 孝弥 [大原記念労働科学研究所 主管研究員]

表紙作品：菅沼 緑「並ぶかたち」  
材料：木材  
会場：ときわ画廊（東京・神田）  
年度：1980年  
撮影：安齊重男



## 地域社会の未来像を見つめて

### 地域で、『多文化共生』を目指す！ ～長崎県島原半島の一例

..... [しまばら半島国際交流クラブ] 松下 英爾 ..... 5

### 介護の仕事で地域に恩返しを

..... [NPOののはな] 遠藤 さとみ ..... 13

## Series

ILOインド南アジア産業安全保健通信 (11)

産業安全保健におけるグローバルな課題 ILO報告から

..... 川上 剛 ..... 17

「#教師のバトン」で伝わる (28)

教職員の過酷な勤務環境 ..... 藤川 伸治 ..... 20

グリーフケアとリーガルケア (2)

労災編 ..... 細川 潔 ..... 26

## Series

労研アーカイブを読む(92) フリッカー値測定による疲労判定 .....	椎名 和仁 .....	30
---	-------------	----

## Column

## KABUKI

## 妹背山女庭訓

歌舞伎で生きる人たち その廿二——桜の枝と雛飾り .....	湯浅 晶子 .....	36
--------------------------------	-------------	----

## 自由と想像(11)

彫刻に向かって .....	菅沼 緑 .....	40
---------------	------------	----

## つれづれなるままに

労働科学研究所とメタセコイヤ .....	斉藤 進 .....	41
----------------------	------------	----

労働科学のページ .....		49
----------------	--	----

## BOOKS

## 『明治から令和への産業保健の時間旅行』

産業保健をタイムトラベル .....	加部 勇 .....	61
--------------------	------------	----

## 『「心の病」の脳科学 なぜ生じるのか、どうすれば治るのか』

「心の病」が治る時代へ .....	椎名 和仁 .....	62
-------------------	-------------	----

## 『トイレからはじめる防災ハンドブック

## 自宅でも避難所でも困らないための知識』

災害とトイレについての知識が満載、職場にも家庭にも必携の書 .....	編集部 .....	63
-------------------------------------	-----------	----

次号予定・編集雑記 .....		64
-----------------	--	----

# 労研の研究の今昔

岸田 孝弥

公益財団法人大原記念労働科学研究所（以下、労研）は設立以来103年が経過した。私はかつて労研の労働生理学第二研究室（沼尻幸吉研究室）で研究・調査に関わってきた。巻頭言を執筆するにあたり、労研がどのような産業現場で、どのように労働実態をとらえて社会に伝えてきたのか、駆け足で辿ってみよう。

沼尻博士はエネルギー代謝率の研究で労働科学分野の研究領域を切り開いてきた人であるが、1951年、労研の原点ともいえる倉敷紡績の女子従業員の仕事計測や作業条件の調査研究をスタートさせている。翌年の1952年には兵庫県内の製鋼所で労働強度と労働量の調査を実施、1958年には横浜市の製粉工場では労働負担調査、神戸市の製糖工場では労働強度の調査に着手した。また、1959年から1960年にかけて東京都内をはじめ、北海道、岩手、秋田等で郵便局の外務員と内務員の労働負担調査を行った。冬季に積雪のある北海道や東北地域では外務員がスキーを履いて配達することがあり、労働負担調査の実施によって過酷な業務実態の貴重なデータを集めている。現在では郵便局の外務員はバイクや車で収集や配達を行うため業務の負担は軽減したが、バイクでの業務では振動が問題になるなど、時代を経ても労働現場では常に何かしらの問題が発生しており、労働現場の事態を記録しておく

ことの重要性を改めて認識している。郵便業務の調査研究は、運搬作業の研究に移行していき、1960年から1963年にかけて通運業や港湾建設業、一般の運輸業における労働強度の研究も進められた。

エネルギー代謝率が重要なポイントとなる鉱山や鉄鋼・炭鉱での研究も着々と進行し、炭鉱については1963年から北海道や常磐炭鉱で調査を実施、1966年には当時の石炭局が作業量等の一連の調査を発表した。

一方、電気洗濯機の普及を背景に、1960年代から家事労働の研究が始まった。生活時間調査や労働負担調査を実施したことによって女性労働の研究として新しい研究領域を確立した。

1970年代に入ると農業労働や漁業労働の研究分野も開拓している。また、沼尻博士は産業現場での調査とは別に労働者の体力・栄養・健康の研究についてもまとめている。

以上、1950年代から1980年までの労研の調査活動のほんの一端を紹介したが、機会があればその後の研究活動についても紹介していきたいと考える。当時を知る人がだんだん少なくなる中で、かつての労研研究の熱量を伝えさせて頂くのも私の使命であると思う。

さて、現代の労研の研究活動を概観してみると、まず「テレワークに関する研



きしだ こうや  
大原記念労働科学研究所 主管研究員

究」が挙げられる。100周年記念事業とリンクして、テレワークに関する諸問題の解決に向け、真正面から取り組んでいる。また、過労死研究にも注力しており、特に「トラックドライバーの過労死等防止計画」のフォローアップは、単に過労死問題を取り上げて研究するのではなく、具体的な過労死等防止計画の実行部隊として取り組んでいるところに特徴がある。

さらに、労研の新しい試みとして注目されるのが「知的障害者雇用促進」への取り組みである。労研は長年にわたり労働者の雇用促進にかかわる研究を行ってきたが、新しい研究テーマとして「知的障害者雇用促進への取り組み」を挙げているのは注目される。現在の労研が生活の視点から労働をとらえた研究を行っていることを高く評価し、これからの労研に大いに期待したい。

